

# 江戸時代における仮養子手続き

—福岡藩黒田家の後継問題—

大森 映子

## はじめに

本稿は、筑前黒田家の後継者問題をめぐる史料「御当分御養子御願記」の紹介を軸に、近世中期における仮養子手続きの実態と位置づけについて検討を試みるものである。

仮養子とは、跡継ぎのいない大名や旗本が、江戸不在中あるいは往来の途上における不測の事態に備えて指名しておく一時的な後継者のことであり、当分養子とも称された。在府中であれば、当主危篤という緊急事態に直面したとしても、急養子（末期養子）願書の提出により、家の存続をはかることが可能であった。しかし江戸を離れている時には、急養子手続きに不可欠な幕府役人の立会い（判元見届）は事実上困難であった。<sup>(2)</sup> 仮養子の指名はいわばその代替である。通例、願書は江戸出立前に月番老中に預け置かれ、参府と同時に返却された。従って仮養子願書は、江戸不在中における当主死亡という条件下においてのみ有効性をもつにすぎなかった。しかし帰国中の大名にとっては、仮養子願書は万

一の場合、家の断絶を回避しうる重要な願書であつた。

ただ仮養子は、正式の養子とは異なり、一時的な後継者指名である。例えば、実子誕生に典型的に見られるように、より正統な後継者が登場すれば、仮養子に付託された継承資格は消滅する。その意味では不確定要素が強いためか、これまで仮養子については必ずしも十分な検討がなされてこなかった。確かに仮養子は、実際の相続段階では継嗣となつていない場合も多い。しかし別稿でも指摘したように、<sup>(3)</sup> 仮養子の選択は、暫定的とはいえ実子不在の中で後継順位を明らかにする手続きである。また急養子（末期養子）願書をみると、かつて仮養子として指名した人物を、改めて急養子に申請している事例が少なくない。<sup>(4)</sup> このことからすれば、仮養子をめぐる大名側の意識と位置づけは、武家相続の特質を明らかにする上で避けて通ることのできない重要な問題といえよう。

本稿が対象とするのは、筑前福岡藩六代目の当主黒田継高<sup>つぐたか</sup>の仮養子問題である。黒田家は長政を祖とする四十七万石余の大名であるが、後継者確保の上では必ずしも順調ではなかった。とくに十八世紀半ば以降は、ほとんど血縁関係のない他家からの養子によって家の存続をはからなければなくなる。血縁的に無縁の養子の中でもっとも早く迎え入れられたのが、継高の養子となる治之<sup>はるゆき</sup>（隼之助）であつた。<sup>(5)</sup> 隼之助は御三卿一橋宗尹<sup>むねただ</sup>の五男であり、八代將軍吉宗の孫に当たる。ただし継高は、隼之助を正式養子として迎える直前に、仮養子として備前岡山藩池田宗政の二男長寛<sup>ながひろ</sup>（護之進）を指名していた。隼之助と護之進という二人の後継候補の中で、黒田家が最終的に選択したのは隼之助であり、その経緯については田原昇氏が『黒田家譜』を分析される中から明らかにされている。<sup>(6)</sup> しかし本件は、仮養子と本養子の関係、あるいは仮養子に対する幕藩の位置づけを考察しうる興味深い事例としてもとらえることができよう。

本稿では、黒田家における後継者問題の発生段階から、仮養子をめぐる藩の動きと出願過程、および最終的な養子手続きの完了に至るまでの経緯を辿りながら、仮養子制度の特質と意義について検討する。

## 一 黒田継高の後継問題

## (1) 実子の死去と後継問題の浮上

黒田継高が深刻な後継者問題に直面することになるのは、宝暦十三年（一七六三）八月のことである。

継高には十九人の実子があつた。<sup>(7)</sup> そのうち、男子は四人であるが、早世した二人を除くと、成人に達したのは庶出の重政と長経の二人だけであつた。<sup>(8)</sup> 継高が重政の存在を幕府へ届け出たのは、寛保二年（一七四二）正月のことである。<sup>(9)</sup> 出生後直ちに届を出さずに、数年を経過してから「丈夫届」という形で実子を披露するという手段は、特に庶出男子の場合にはしばしばとられているが、重政の場合も六歳になった段階での届出であつた。<sup>(10)</sup> この時、重政の年齢は三歳年長とされ、実際の誕生年は元文二年（一七三六）であつたが、公的には享保十九年（一七三四）生まれとして扱われることになる。

この届出以降、重政は継嗣として位置づけられるが、宝暦十二年（一七六二）七月十四日、福岡にて死去する（実年齢二十六歳、公的年齢二十九歳<sup>(11)</sup>）。嫡子重政を失った継高は、唯一残された男子である長経を跡継ぎとすべく、老中松平武元にその意向を伝えた。ところがまだ正式手続き前の翌十三年八月二十六日、長経もまた福岡で病死した。<sup>(12)</sup> 二人の実子の相次ぐ死去により、直系男子を失った継高はあらためて養子の確定を迫られることになったのである。

当時、継高は六十一歳を迎えていた。年齢的にも養嗣子の決定が急務であつたが、この時は国許の福岡に帰国中であつた。従つて、ともかくも仮養子願書を提出し、江戸参勤までの後継候補を指名しておく方針で動き出すことになった。しかし、同姓中に養子適格者を見いだせない中では、縁戚関係のある大名家に仮養子候補を求めるしかなかった。

この時、仮養子候補としてあげられたのが、備前岡山藩池田宗政の嫡出次男護之進である。「此節御仮養子之儀、護之進様ニ御究可被成与思召候趣被仰出候」とあるように、継高は当初より護之進を最有力候補とみなしていた。<sup>(13)</sup> 護之進の

母は継高嫡出の長女、藤子であり、継高からすれば、護之進は外孫であつた。但し仮養子申請には、池田家の了承を取りつけることが先決である。そのため黒田家では、直ちに家老浦上彦兵衛と番頭占部忠右衛門とを岡山へ派遣し、池田家当主宗政と隠居継政の許可を求めることになった。

このように池田家との間で交渉を進める一方、継高は江戸家老らに対して二つのことを指示した。<sup>(14)</sup>

一、御仮養子御願被成、追而御養子ニ被成候御人柄、御振替之儀者、公刃不相成御法前ニ候哉、承合被申越候様最前も申入置候、右之趣、重疊承合可被申越候（行間朱書略）

一、最前申入置候御四人様、御年齢・御生質・御恰好等之儀、内々ニ而相調へ可被申越候、勿論必御先方江洩聞ニ不申候様取斗可被申候（行間朱書略）

（傍点及び括弧内引用者、以下同）

第一は、仮養子の位置づけに関する確認である。仮養子願書の提出後、改めて正式の養子を申請する段階で、別の者への「振替」、つまり仮養子に指名した者以外を立てることの可否について幕府の見解を質すよう指示した。第二は、護之進以外の候補者に関する状況調査である。ここでは、筑後柳川藩立花鑑通の弟、および出羽鶴岡藩酒井忠寄の次男万之助（康伴）、また播磨安志藩小笠原長達ながみちの次男保三郎（忠苗）<sup>(15)</sup>と三男の匡之進（忠興）<sup>(16)</sup>の四名があげられている。江戸からの返答によると、「御四人様之内、左近将監様（立花鑑通）御舎弟ハ御病身ニ被成御座候由」、残る三人については「御出来宜、御年齢御相応ニ有之哉之儀、御生質急ニ者中々難相知奉存候」であつた。すなわち、病身の一名を除けば、三候補とも一応出来はよく、年齢好も相応との調査結果であつた。もつともそれぞれの候補の性格までは不詳としているが、これはいずれも護之進を仮養子とすることが不調に終わった時の次善の候補であつた。ちなみに継高の娘たちは、池田宗政の他、酒井忠温ただはる（康伴の兄）、立花鑑通に嫁いでおり、また小笠原家は継高の実母の実家である。右の候補は、

このような縁戚を軸に選ばれた者であった。黒田家では仮養子の位置づけを幕府側に確認する一方、あわせて第二、第三の候補の内情調査を行い、万一の事態に備えたのである。

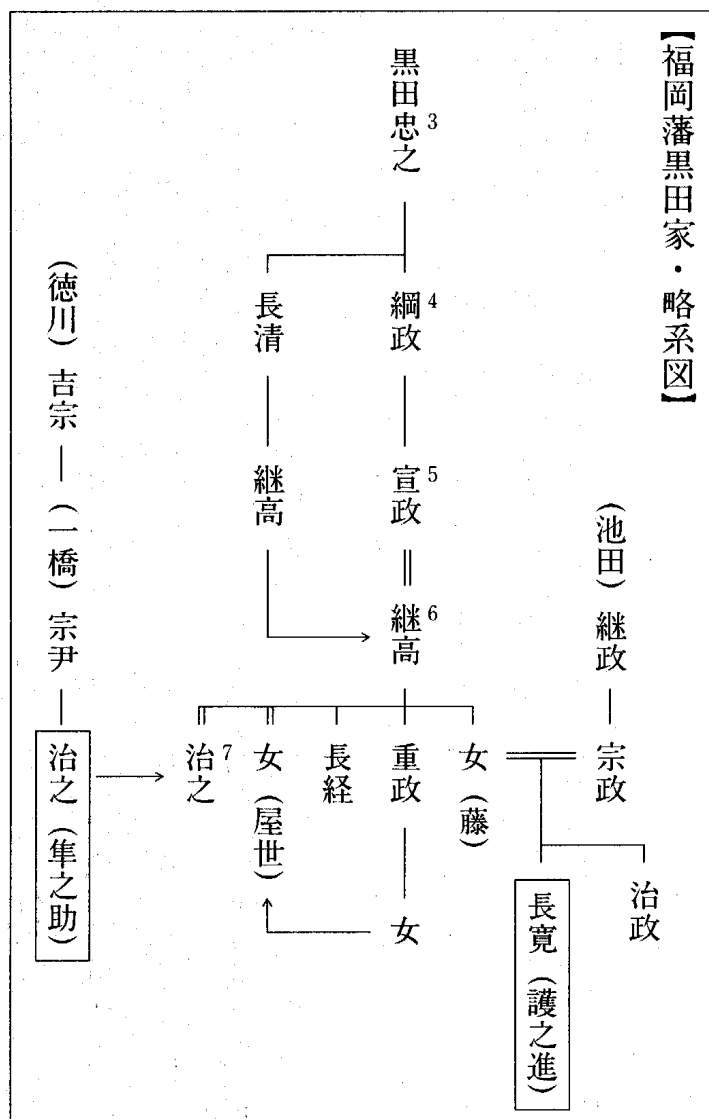
## (2) 仮養子の位置づけ

それでは、当時黒田家は仮養子をどう認識していたのであろうか。幕府への伺いの前に示された江戸家老の見解は次の通りであった。①仮養子として申請した者が「他人」の場合、「由緒」ある者（縁戚関係のある者）への願い替えは可能である。②「由緒」ある者を仮養子に指名した時は、その者を差し置いて他人を養子に迎えることはできない。③縁戚関係のない他人を仮養子とした場合も、別の他人を本養子に立てることは難しい<sup>(16)</sup>。

右の原則をみれば明かな通り、仮養子願書自体は有効期限付だが、仮養子指名の実跡は重く、原則として血縁的正統性に次ぐ資格が与えられることになる<sup>(17)</sup>。これを前提に、黒田家では老中松平武元<sup>なちか</sup>に改めて「願替」の可能性を打診した<sup>(18)</sup>。

御仮養子与申儀、御相続之御為斗之儀ニ  
御座候得者、追而本御養子之節直ニ御仮

【福岡藩黒田家・略系図】



養子之御方様を御願被成筈之儀御座候、然共本御養子御願之節ニ至、何そ御差問之品も有之、右之被仰分有之候得者、随分御振替相成儀御座候、本御養子御願之節、御仮養子之御方ニ而無之候得者、其節御用番様にて御尋有之儀ニ御座候、何故ニ御仮養子之御方様を御願不被成哉と御尋有之候節、たとへハ当時御病身ニ有之候と歟、又ハ外ニ何そ御願難被成御訳有之、何々之訳ニ而御願不被成と申被仰披有之候得ハ、御振替之儀随分相成儀御座候、右之御開キ無之候てハ、御振替者難相成事ニ御座候

老中の見解によると、本来仮養子指名者が本養子の第一候補であることは当然ながら、本養子申請の段階で、何らかの「仰分」、すなわち事情説明が可能ならば、別人を立てることも可能だという。要は幕府に対して、病氣あるいは正当な申し開きが可能であれば、必ずしも仮養子を本養子としなくてもよいというのである。

しかし、たとえそうであっても「御仮養子之御方様を御願被成筈之儀」との指摘は軽視できなかった。少なくとも仮養子申請は、大きな事情の変化がない限り、将来的には正式の養子とすることを想定した出願でなければならなかったのである。

なお、この時黒田家側では、あわせて仮養子願書の提出の必要性についても打診している。実はこの時の継高は参勤のため江戸に赴く直前であった。江戸・国許間の意見交換に要する時間を勘案すると、仮養子願書提出は継高の参府時期とほとんど変わらなくなってしまう可能性があった。そのため、「一向御参府之上御願可被仰上哉、夫共一日も御相続之御心当無御座候而者、公迎之趣何程ニ可有御座哉」とあるように、いつそのこと仮養子願書を出さずに継高の出府後に直接正式の養子取組を申請すべきか、あるいはわずかの間でも願書を提出して後継候補を明確にした方がよいのか、という点について確認を求めた。

これに對して、老中松平武元は用人を通じて次のように返答している。<sup>(19)</sup>

御仮養子之儀者、少茂無御遅滞御願被仰上度御儀思召候、御相続不被成御座候而右御願御遅滞被成候而者、公辺之趣如何敷思召候、尤右御相談於御当地御取組相濟、其段於其御地御承知被成、夫右御願書被差越御儀御座候へハ、其後無程御参府も可被遊候得共、御在國中ニ付、往反之日数相立候段ハ誠ニ可被成様茂無御座候、其段者、公辺無御拋訳相立儀御座候、御仮養子之御人柄相究候段御承知被成候上者、御旅中ハ成共御願不被仰上候而者御手拔之様ニ可相成候間、右之所御勘弁御願被仰上候様ニと思召候、此段相心得御国元江宜申上旨

老中の見解では、仮養子願書は即刻提出すべき文書であること、江戸・国許間の合意を取りつけるための遅れはやむを得ないが、仮養子候補のめどが立ったならば、たとえ参勤の途上からであっても願書を提出するのが筋であり、それを怠れば「御手拔」とみなされかねない、というものであった。つまり江戸不在中の大名にとって、仮養子願書は不可欠の文書であり、願書提出はむしろ義務に近かった。

また在国中の願書提出の方法については、「御直之御封印ニ而被差越、御家老・御用人間御使者ニ而御用番様江被指出候御方有之候由」とし、当主本人による自筆願書を嚴封の上、家老あるいは用人の手で月番老中に提出するのが通例であった。しかし時間的な兼ね合いや提出時期の問題からすれば、国許の家老が福岡から岡山へ赴き、内諾を得てから再び福岡へ戻り、改めて藩主直筆の願書の作成と封印を行うとなると、提出時期の遅れは必至であった。そのため黒田家では、岡山への使者を勤める家老浦上彦兵衛に江戸で願書を作成することを指示した。しかし、願書には当主の直判が不可欠である。そこで彦兵衛には、願書案文とともに藩主の「御直判之御判帋五枚」を預け、あわせて印判を江戸に送付している。<sup>(20)</sup>つまり願書提出までの手順として黒田家が想定したのは、まず彦兵衛に池田家との交渉を行わせ、了解取

り付けの上で江戸に直行させ、江戸詰めの重臣との審議の上に「御直判之御判帛」に清書させ、封印して幕府へ提出させる、というものであった。

さて藩主継高の命を受け、池田護之進の仮養子申請許可を託された浦上彦兵衛は、九月五日に福岡を出発し、十四日に岡山へ到着した。そして翌十五日、「拙者（継高）儀男子無御座候付、御二男護之進様此節在国中当時養子願指出度存候、格別之御間柄ニ付、御許可可被下候」とあるように、正式に護之進を仮養子として要請した。ただし注目したいのは、浦上彦兵衛が池田家の家老池田隼人に個人的見解として伝えた次の内容である。<sup>(21)</sup>

此節拙者（彦兵衛）御当地江差越候者、御在国中之御仮養子之御所望之儀ニ候、追而ハ本御養子之御願も不被指上候てハ不叶儀ニ候、本御養子之御方、外ニ曾而思召寄無之候、追而ハ本御養子之儀も此節之御許可ニおゐてハ、先ニよりて又々御所望之御下心ニ被成御座候様被存候、此段全貴様江之拙者御咄ニ而候旨申候

これは、今回は仮養子にとどまるが、いずれ本養子の指名が必要となること、当時の黒田継高には具体的な養子候補は護之進を置いて他にはなく、あらためて正式の養子として迎える心積もりであることを、内々の形で表明したものであった。先に示したように、とくに血縁関係に基づく仮養子は有力な本養子候補であり、右の申し出も当然予測可能であった。しかし黒田家としては、将来的に本養子とすることを見越した要請であることを強調し、一刻も早く池田家の合意を取り付けようとしたのであろう。

この黒田家側の要請に対して、池田家の方も異存はなかった。彦兵衛が「勝手次第御願可被成候」との返答を得たのは、九月十六日であった。<sup>(22)</sup>池田側の了承を取り付けた浦上彦兵衛は、自らは江戸へ向かう一方、番頭占部忠右衛門には「伊予守様御返答書」「空山（継政）様御返答書」「池田隼人相渡候書付」を託し、福岡へ帰らせた。忠右衛門から報告



を受けた継高は、「今度於岡山仮養子御相談之儀、首尾好相整候趣、以早飛脚被申越安堵令大慶候、我等茂来月五日令発足候間、無程於江戸可申承候、其内弥宜様取斗置可被申候」とあるように、早速彦兵衛にねぎらいの書状を送付するとともに、自らも間もなく福岡を発足する旨を申し送ってきた。これは九月二十二日付の書状であるが、池田家側の内諾を得たことにより、継高の継嗣は一応内定した。そして、江戸において幕府老中に仮養子願書を提出すれば、懸案の後継問題は決着する筈であった。

## 二 仮養子と本養子

### (2) 新たな養子候補

国許の家老が岡山との交渉に奔走している間、江戸では全く予期しなかった事態が発生していた。

九月十三日、当主継高不在の江戸藩邸に、幕府奥医師の武田長春院(信郷のぶさとし)が来訪し、留守居役永田蔵太へ面会を求めた。<sup>(23)</sup>長春院の話によると、その朝、長春院は突然一橋宗尹の家老田沼意誠おきのぶの来訪を受けたという。<sup>(24)</sup>一橋家では、老中松平武元より黒田家が養子を探していることを伝え聞き、長春院に五男隼之助の養子斡旋を依頼してきたのである。養子話を持ち込まれた黒田家では、すぐさま田沼意誠の下に江戸留守居役永田蔵太を遣わし、養子の件を確認した。のみならず、老中松平武元からも、「御上御近キ御続柄之御身分ニ候へハ、御家茂御手厚被為成、御官位御昇進等之御年数も御早く相成、御代々御家格ニ茂相成御規模之御事ニ候、旁一段可然御相手」、つまり將軍との縁戚関係は、官位昇進や格式の点で有利であり、黒田家にとって望ましい縁談であるとの助言を受けることになる。<sup>(25)</sup>

この段階ではまだ内々の申し入れであったが、二日後の十五日には、別の奥医師井上交泰院(方正)を仲介者として再度の申し入れがなされ、この縁談が一橋宗尹の強い要望であることが伝えられた。一橋家は、今回の養子話が「公義

之御威光ヲ以押而被仰入候様御聞請不被成候様」とし、決して將軍の權威を背景とした押しつけではないことを強調するが、黒田家側にとって御三卿からの申し入れは重かった。

すでに池田護之進を後継候補とみなしていた黒田家としては、この予想外の養子話に困惑を隠せなかったが、結果的に黒田家が撰んだのは、血縁のある池田護之進ではなく、徳川家との強い絆をもつ一橋隼之助であった。この間の経緯について『黒田家譜』を分析された田原昇氏は、黒田家が隼之助養子の条件として、家の存続の保証と、黒田家代々の役である「長崎御番」の継続委任を提示していることから、本来、養子取組において重視されるべき血縁以上に「家の大事」と存続が優先されたものとして位置づけられた。<sup>(26)</sup>

一橋側の史料にも、「隼之助黒田家へ養子に關し、隼之助家督十七歳未滿にても國中安堵の事、また幼年の内、長崎表勤番家老名代の事、黒田家より願出づべきにつき内談を受く」とあり、<sup>(27)</sup>黒田家側が養子受け入れの条件として、家の安泰と長崎警固役の保証という二点に拘りを見せていたことを確認できる。ただしこの件は、一橋家の権限では請け合えず、結局、田沼意次を通して將軍の内諾を得た上で、黒田家に保証された。

このような経緯をみれば、黒田家の選択の背景に、家の存続に対する強い危機感があったことを窺えよう。幕府の相続規定によると、当主が十七歳未滿で死亡した場合、原則として相続を認めないとする一項があった。<sup>(28)</sup>もともと実際には、將軍の「思召」によって継承が認められる場合も多かったが、大名側にすれば断絶の懸念を全面的に否定することはできなかった。とくに黒田家の場合、「逐々不幸の変に逢ぬれハ」とあるように相次いで実子を失った経緯があり、<sup>(29)</sup>若年の当主を迎えることは単なる杞憂では済まされなかったのである。のみならず、黒田家は後継者を確保できずに分家を解体された経験があった。四代目の黒田綱政は、元禄元年（一六八八）に弟長清に五万石の新田を分知し、分家大名として成立させたが、綱政の跡を継いだ宣政には男子がなく、結局、長清の嫡子継高が養子として本家に入った。その

後継高は本家を相続するが、一方、長清には他に男子がなく、長清の死去に伴い新田藩は解体されている<sup>(30)</sup>。その意味でも、黒田家にとっては殊更に後継者の確保は重要課題として認識されていたと言えよう。

ところが、血縁上の最有力候補池田護之進はまだ十三歳であった。護之進が十七歳未満であったことは、黒田家にとって大きな不安材料であった。護之進の場合、「幼年なる上いまた疱瘡も病給ハす、継高ハようやく老年給ヘハ、一旦不諱の事もあらんに、護之進十七歳以前にて、若又病変もあらハ、家の災害となるヘシ」としているように、まだ幼年であり、疱瘡未罹患であることが問題視される。もちろん隼之助も十二歳であったが、「十七歳未満なりとて、御歴代の御大法をもて当家の大難となる事は有ましきや」としているように、万一の場合は特別の配慮を期待できると判断されたのである。これは本来最優先すべき血縁よりも徳川家との政治的関係を重視した言い訳とも受け取れるが、黒田家にとって相続における年齢的制約が極めて重いものとして意識されていたことは明白である。少なくとも「御十七歳未満ニ而家督御相続之上、万一異変等有之候節」を問題としてしていることからすれば、後継者の身に万一のことがあった場合には、護之進よりも隼之助の方がはるかに有利だとする判断があった<sup>(31)</sup>。

黒田家の方針は、一橋家の申し出を受け入れ、隼之助を養子とすることに固まりつつあった。当主継高も、「隼之助様御養子之由ハ、格別之御方様与申、御先キ共御家之御為御養子ニ御決断被成候」とあるように<sup>(32)</sup>、將軍家との結びつきを強める養子を選択することになる。そして隼之助養子の件を決定づけたのは、先の二ヶ条であり、家の存続と長崎警衛役の保証は、將軍の内意として十一月十二日に黒田家側に伝えられた。

## (2) 仮養子願書の扱い

岡山での交渉をおえた浦上彦兵衛が江戸に到着したのは、十月三日であった。せっかく池田家の内諾を取り付けたに

もかわらず、この時すでに黒田家の大勢は、隼之助の養子要請受け入れの方向に傾いていた。この時の彦兵衛の当惑は想像に難くないが、仮養子願書の問題は、まだ解決したわけではなかった。

九月段階の老中松平武元の指示は、仮養子候補を早急に確定し、たとえ当主の出府とほぼ同時であったとしても、事前に願書を提出すべきとするものであった。のみならず、仮養子願書を即座に届けないのは、幕府に対する「御手拔」とさえ言っていた。ところが隼之助養子の問題が浮上すると、今度は「御仮養子少々御延引被成候而も不苦候趣」とし、微妙な対応の変化を見せる。しかし仮養子願書の提出が常道の手続きである以上、相続問題に慎重を期す黒田家としては、いかに一橋家の関わる問題であろうとも願書の提出に拘りを見せた。具体的には「隼之助様御養子御相談之儀、御返答之御飛脚着致候迄、仮養子御願書不被指出候段者、何分御手拔之様ニ有之、第一御不安心之御儀ニ候」として、ともかくも仮養子願書を提出したい旨を表明した。そして「右近将監様思召相背候様ニ御聞被遊候而者恐入候次第ニ候得共、片時茂御仮養子御願ニ指慎置候而者、国中上下共ニ安心不仕次第ニ候」とあるように、<sup>(33)</sup> 今回の老中の指示を無視する形となるものの、仮養子願書の提出を躊躇すれば、家中の不安をあおりたてるに等しいと陳述し、あくまで願書提出を望んだのである。

これを受けた武元は「刑部卿様方御養子御相談之儀ハ 上達致居申儀故、右御返答有之迄御沙汰無之とて茂御手拔之筋二者相成間敷」とあるように、一橋家からの養子問題が関わっていることは、將軍も承知の上であり、決して手落ちにはならないとしながらも、仮養子願書の提出は、あくまでも黒田家の判断次第であると返答した。ただし、仮養子願書提出にあつては、一橋家側に断りを入れるようにとも示唆している。<sup>(34)</sup>

隼之助様御取組之儀、於其元何茂難渋ニ而此節之御仮養子御願指急候様ニ共御聞受候而者、何廉と難渋之儀茂出来

可仕候間、(中略)此節之儀者 隼之助様御取組御成就被成間敷と存候付御仮養子之儀被指急筋にてハ無御座、御答御延引ニ相成候付而ハ、其間之儀何分ニ茂不相濟候ニ付、先御仮養子御願被指出存念之趣 (下略)

つまり、今回の仮養子願書提出は、隼之助養子に対して何らかの障害や異議あつてのことではなく、あくまでも正式の養子決定までのつなぎであることを説明しておくように、との助言であつた。このようなやりとりからすれば、幕府側が隼之助養子について黒田家の早急な決断を望んでいたことは明白であろう。と同時に、一時的とはいえ血縁関係のある護之進を後継者として表明することは、幕府が自ら仮養子制度の原則を軽視するに等しく、隼之助養子の件が幕府側の強引な押しつけとみなされかねない、とする懸念があつたものと推測される。

もつとも仮養子願書の提出については、黒田家中にもさまざまな思惑が錯綜していた。たとえ隼之助を養子に迎える方針を決定したとしても、継高の出府までは、定石通り護之進の仮養子願書を提出すべきだとする意見もあれば、隼之助の養子貰い受けを決定した以上、「御仮養子も隼之助様ニ御極被成思召」とあるように、仮養子も隼之助をたてるべきだとする判断もあつた。その意味では、突如隼之助の養子話が浮上したことは、諸側面において混乱を招く結果になつたが、ともあれ黒田家は十月十三日、護之進の仮養子願書を提出することになる。<sup>(35)</sup>

私儀、男子無御座候、在国中若不慮之儀茂有之候者、松平伊予守二男池田護之進当未十三歳ニ罷成候、私外孫ニ御座候、其外親族ニ相応之者無座候間、右護之進養子被仰付、跡式相続仕候様奉願候、以上

宝曆十三未九月七日

御名 御名乗無之

御直判

酒井左衛門尉殿

松平右近将監殿

秋元但馬守殿

松平右京大夫殿

ただしこの仮養子願書は、あくまでも継高の江戸不在期間中のみの願書として形式的に提出されたにすぎない。もはや護之進を正式の養子とする道が絶たれている点からすれば、正しく限定付の願書であった。継高は十一月十三日、江戸に到着するが、仮養子願書はその日のうちに「先達而被差出候当分養子願書、致返進候」との添状とともに、継高の手に返却されて失効したのである。<sup>(36)</sup>

一方、池田家に対しては、すでに十月十八日の時点で、岡山を訪れた黒田家の家老郡和泉より「無拠次第致出来候ニ付、御内約之儀及御断候」とあるように、断りが入れた。<sup>(37)</sup>この時点で池田家との養子話は白紙に戻され、結局、護之進の正式の養子話は、表沙汰になる以前にたち消えとなったのである。

### (3) 婿養子手続き

右のような経緯の上に、黒田継高は自らの後継者として一橋隼之助を迎えることを正式に内諾した。ただし継高は、血縁のない隼之助を後継者とするにあたり、継高の嫡孫で、故重政の忘れ形見である娘（屋世）の婿養子の形をとることを望んだ。しかし「屋世姫様御事、御孫娘ニ而ハ難相済候、依之少将（継高）様御養女ニ被成候段、御届書早々被差出候様ニ」とあるように、<sup>(38)</sup>婿養子とするには、先に屋世を継高の養女とする必要があった。そのため黒田家ではまず「同氏故修理大夫（重政）娘、私養女ニ仕候、此段御届申上候」との届書を提出し、屋世の立場を孫から娘に変更した。<sup>(39)</sup>

大名の養子取組の場合、養父側が幕府に養子願書を提出するのを常道としていた。しかし、今回は將軍家ゆかりの一橋家からの養子であるために「此方より御願ニ不及、上より御掣養子に被仰出候趣ニ候」、すなわちあくまでも將軍から「仰付」られる性格のものであった。

屋世姫の養女届は十一月二十二日に提出されるが、その日のうちに、老中からは翌二十三日の登城を指示する奉書が届けられる。そして二十三日、江戸城に登城した継高に対して、正式に「松平隼之助様御掣養子被仰付」ことが申し渡され、隼之助の養子一件が確定したのである。<sup>(40)</sup>

なお將軍家治に対する御請けの御礼は、十二月十五日に執り行われるが、養父継高が一橋邸に赴き、婿養子隼之助と初めて対面したのは、翌十六日のことであつた。<sup>(41)</sup>かくして隼之助は婿養子として黒田家に迎え入れられたが、縁約相手であつた屋世は、明和八年に婚儀を待たずして十一歳で早世した。<sup>(42)</sup>そのため女性を通して黒田家の血筋を維持しようとした黒田家の目論見も、この段階で費える結果になつたのである。

### むすびにかえて

本稿で扱った黒田家の事例は、仮養子に指名した池田護之進を正式に養子に迎えることなく終わるが、これは將軍縁戚の養子話が絡んだ結果であつた。むしろその手続きや交渉経緯から検証しうるのは、近世大名にとって仮養子の指名が家の存続と密接に結びついた重大事であつた点である。

まず第一に、仮養子願書提出は江戸を離れる大名に義務づけられ、継高のように跡継ぎに先立たれた場合も、早急の後継者候補の明示が求められた。第二に仮養子でも血筋が重視され、たとえ「仮」であつても安易な選択は許されず、

本養子を見通した指名でなければならなかった。だからこそ、一橋隼之助の養子話が浮上して以降の幕府は、池田護之進の仮養子願書提出には消極的であった。これは、血縁的正統性をもつ護之進を差し置いた養子話は、血筋の無視に等しいという認識があったからに他ならない。従って、幕府とすれば護之進の存在を不問に付したまま、隼之助の養子話を成立させることが最善の方法であったと推測される。もっともこの件は、相続に不安をいだく黒田家の同意を得られなかったが、幕府が仮養子願書提出に逡巡を示したことは、仮養子制度の重みを示す証左であろう。と同時に、単なる「仮」では済まされない側面があったことは明白である。

はじめに指摘したように、これまで仮養子については十分に検討されてきたとはいい難く、養子相続の上でも必ずしも重視されてこなかった問題のひとつである。しかし仮養子が正式養子、あるいは急養子と密接に結びついていることを考えれば、改めて歴史的な位置づけが求められよう。もともと仮養子指名は、江戸不在中の対応として大名たちに義務づけられたものであった。そのことはすなわち、参勤交代の開始と同時に常に後継者を意識し、帰国の都度、後継の心積もりをしながら、家系の断絶に対する危機回避の手段を講じていたことを意味する。もちろん実子にめぐまれた大名にとっては、仮養子問題はさほど重大ではないかも知れない。しかし黒田継高の事例が如実に示すように、予期せぬ後継者喪失は家の存廃に直結しかねない問題であった。仮養子指名はその危機に対応しうる有効な手だてとして、ゆるがせにできない制度であった。

このような武家社会における仮養子については、更なる事例の集積と同時に、本養子・急養子との関係を明らかにしつつ、武家養子の特質として位置づけていくことが肝要であろうと考える。



## 注

- (1) 「御当分御養子御願記」(福岡県立図書館所蔵・複写史料 黒田文書・二次・一一四)
- (2) 判元見届とは、大名の場合、大目付が臨終間際の当主の病床に立ち会い、急養子指名が本人の意思であることを確認する手続きであるが、実際には死後となる場合も少なくなく、手続きとしては形骸化していた。
- (3) 拙稿「江戸時代における仮養子と相続」(『湘南国際女子短期大学紀要』一一、二〇〇四年)
- (4) 拙稿「備中生坂藩における相続問題」(『日本歴史』六〇二、一九九八年)
- (5) 『寛政重修諸家譜』巻七 二二三頁
- (6) 田原昇「近世大名における養子相続と幕藩制社会」(『史学』六七―二、一九九八年)
- (7) 『黒田家譜』巻四(文献出版、一九八二年)。
- (8) 『黒田家譜』巻四 二二七頁。重政の丈夫届は寛保二年正月七日に提出された。
- (9) 中田薫「徳川時代の養子法」(『法制史論集』第一巻所収 岩波書店、一九二六年)
- (10) 『寛政重修諸家譜』巻七 二二三頁
- (11) 『黒田家譜』巻四 三八六頁
- (12) 同 四〇五頁。この時期は、まだ継高も参府前であり、結局継嗣となるはずであった長経は、將軍へのお目見えも果たせないままに死去した。
- (13) ・(14) 「御当分御養子御願記」八月二十八日江戸江大早飛脚被指立左之通被仰遣候事
- (15) 立花鑑通の弟については複数いるために特定できないが、酒井康伴は元文五年生まれの二十四歳、小笠原忠苗は延享三年生(十八歳)、同忠與は宝暦八年生(六歳)であった。
- (16) 「御当分御養子御願記」九月十一日大早飛脚を以申来候事
- (17) 中田前掲論文
- (18) ・(19) 「御当分御養子御願記」九月十一日大早飛脚を以申来候事
- (20) 印判は九月二十六日に、十三日の日限を切った飛脚に託され、江戸へ運ばれることになった。但し実際には封はしたものの、押印しない形で提出された。
- (21) ・(22) 「御当分御養子御願記」九月十六日大早飛脚を以左之通及言上候事

- (23) 「高満公御養子記 仁」宝暦十三癸未年九月十三日条（福岡県立図書館所蔵・複写史料 黒田文書・二次・四八）。なお当該部分は、『黒田家譜』における関連部分（巻四 四一〇～四一五頁）とほぼ一致する。
- (24) 一橋家老となった田沼意誠は、当時將軍家治の側近として実力を発揮しつつあった意次の実弟である（『寛政重修諸家譜』巻十八 二六五頁）。
- (25) 「高満公御養子記 仁」宝暦十三癸未年九月十三日条
- (26) 田原前掲論文
- (27) 『新稿 一橋徳川家記』宝暦十三年十一月十日条 一一一～一二頁
- (28) 「柳営秘鑑」巻二（『内閣文庫所蔵史籍叢刊』第一期五巻、汲古書院）
- (29) 『黒田家譜』四 四一二頁
- (30) 『寛政重修諸家譜』巻七 二二二頁
- (31) 『黒田家譜』四 四一二頁
- (32) (34) 「御当分御養子御願記」十月十八日備後尾道御泊り左之通江戸江被仰遣候事
- (35) 同 十月十三日大早飛脚を以言上
- (36) 同 十一月三日御仮養子御願書御返被成候事
- (37) 「宝暦十三年留帳」（池田家文庫マイクロフィルム史料）（岡山大学付属図書館所蔵）にも、関係記載がある。
- (38) (39) 「高満公御養子記 仁」（宝暦十三年）十一月二十二日条
- (40) (41) 「高満公御養子記 坤」（福岡県立図書館所蔵・複写史料 黒田文書・二次・四七A）
- (42) 『黒田家譜』巻五 二三頁

## 〔附記〕

本稿の作成においては、史料所蔵機関である福岡県立図書館をはじめ、岡山藩研究会その他の関係各所に大変お世話になった。記して謝意を表したい。